

「お年玉、預かっておくね」はなぜNGか？

思春期（中高生）の男の子は、しっかりしているようで、ある部分に関してはとても幼いという特徴があります。だから、「何を任せて何を管理すればいいのかわからない」という親御さんも多いかもしれません。

この先生は、「できる限り自分のことは自分でマネジメントさせるべきだ」と訴えています。

「お金」の問題もそのひとつ。

子供が祖父母や親戚から受け取ったお年玉を、親が管理しているというご家庭は多いのではないのでしょうか。「お年玉、預かっておくね」という一言で、親が全額を管理することにさほど疑いが持たれることはないようですが、この言葉もNGフレーズです。

中学生になったら、通帳やキャッシュカードを本人に渡し、子供自身に管理させる方向にシフトしていくべきでしょう。

そう言うと、「無駄遣いをして、すぐになくなってしまいます！」と不安を漏らす方がいます。でも、それならそれでいいのではないのでしょうか。

お年玉を使い切ったからといって、彼らが食べるものに困ったり、生活が立ち行かなくなったりするわけではありません。それより、お金の大切さを学ぶための「授業料」だと思えば、無駄遣いだとは言いきれないのです。

残金がゼロになったときに、むなしさや不安を感じるはずです。その経験があれば、「慎重に使わなければ……」という気持ちが芽生えるでしょう。いつまでも親が管理をしている限り、お金が減ることはありません。けれども、その代わりに、生きていくために必要なお金の感覚がまったく育たないということにもなってしまいます。

正しい借金の作法を教える

せっかくお金の話をするのなら、「借金」についてもきちんと学ばせておきたいところです。未成年であれば、自分の意思だけで借金をすることは基本的にはないと思いますが、やはり正しい知識は身につけておくべきです。

不動産や車を買う場合の「大きな借金」は必要不可欠だとしても、目先の欲求のための「小さな借金」は、高い金利を払うためにするようなもの。こうした事実も機会をつくってきちんと教えたほうが良いと思います。

最近では、カードローンやカードのリボ払いなどで手軽に借金をすることができます。そのしくみを正しく理解しておかなければ、社会人になったときに気軽に手を出して、身の程を超える借金を抱えることになりかねません。

日本ではあからさまにお金の話をするのは下品だという考え方が根強くありました。その風潮は今でも根強く残っています。学校でのお金の教育も、十分進んでいるとは言えません。しかし、これだけ情報が氾濫している時代に、子供たちをお金から遠ざけてしまうのは、逆に不自然でしょう。親がその役割を果たすという覚悟で、日常的、かつ積極的にお金とのつきあい方を話題にしていくほうがよいと思っています。

子供が金融や資産運用の分野に興味を持ったのなら、知識を与えるのは決して悪いことではありません。投資に関して、親に十分な知識がないのなら、一緒に学んでみるのも悪くはないでしょう。